

書写資料における書誌作成の課題と対応

和漢古典籍研究分科会

立正大学図書館 松尾 蘭
 日本体育大学図書館 山中 浩子
 中央大学図書館
 立正大学図書館 小此木 敏明

1. はじめに

和漢古典籍資料には、テキストが印刷された「版本」のほかに、手書きの「写本」が存在する。写本にはタイトル・著者・書写年等の情報が書かれていないことも多く、書誌の作成自体が難しい。そのため本稿では、「書写資料における書誌作成の課題と対応」というテーマを設け、未経験者でも写本の書誌を作成できるよう、注意点や調査方法の実例を示すことにする。

なお、日本目録規則 (NCR1987R3) の3.0 通則によると、「書写資料」は写本・手稿だけでなく、その複製物も対象とする他、洋書にも適応できるとするが、今回は書誌作成業務にて扱うことが多い江戸時代の写本に限定して調査を行った。また、調査対象の資料には会員校の所蔵本を用いた。

2. 書写資料とは

海野圭介「写本について—奥書・識語を中心に—」を参考に述べる。

はじめに、書写資料の歴史について触れる。現存する日本最古の写本は、615年、聖徳太子著、自筆稿本と伝える「法華義疏」とされ、7世紀以後、多くの写経が行われた。10世紀に入ると「かな」が確立し、連綿体を発展させ、日本独自の写本の様式を生み出し、近世に入ると商業出版が広く行われるようになるが、写本も根強く制作・享受された。日本で写本が重視された理由として、まとめると次のようになる。

- ①写本を版本より上位に見る
- ②有名人、公家・書家等の筆蹟を尊重する
- ③軍記物・実録・地方史等写本でないと流通できない
- ④講義録、芸道の秘伝書等一般への流布を嫌う
- ⑤自分自身で書物の制作を行う

現在に残る写本の多くは江戸時代に作成されたものだが、写本が書物の中で重要な位置を占めるのは明治期をもって終わる。

次に、書写資料の種類を見る。写本には著者が自ら書いた「自筆本」、それを転写した「転写本」があり、転写には次の方法がある。

- ・透写：薄様あるいは薄手の楮紙を親本の上に置き、筆でなぞり書きしたもので、忠実に再現される。
- ・謄写：紙面の忠実な再現は意図せず、テキストを転写すること。親本を横に置いて書写した。写本の多くはこれである。

また、親本を写した後それと違いがないかを改めること、他の伝本を入手しそれとの差異を改めることを「校合」と呼ぶ。転写本を制作時代で区分すると、室町時代以前は「古写本」、江戸時代以後は「近写本」、明治時代以後は「新写本」と呼ぶことがある。

最後に、奥書・識語について述べる。奥書・識語は本文の末尾に記されるのが通例で、年紀や署名を伴うものが多く、どのような素性の本を、どのような理由で、いつ、誰が書写したか、書写年

代と書写者及び伝写の系統や伝来の過程を知る重要な手がかりとなる。なお、奥書と識語の使い分けは曖昧で、未だ定説を見ない。奥書は、「本奥書」と「書写奥書」に区別され、本奥書は、親本にあった奥書をそのまま転記したもので、「本云」、「本奥云」という注記や署名の後に「判」、「在判」とあれば本奥書と判断できる。一方、書写奥書は、書写者が書写した際に記した奥書である（親本にある書写奥書は本奥書となる）。しかし、書写者自身が書写奥書を記さなかったり、奥書が架空のものであったり、奥書・識語が書写者や書写年代を記していないことも多くあるため、書誌作成上、注意が肝要である。

3. 書誌作成時の課題

書写資料の調査事例を紹介する前に、NII コーディングマニュアル（和漢古書に関する抜粋集）と日本目録規則（NCR1987R3、NCR2018）により、責任表示（タイトル・編著者）と書写事項（出版頒布に関する事項）の記述方針を確認する。細部を除き、両者の方針は共通しており、まとめると以下のようになる。

- ・タイトルと編著者は、情報源からの転記が原則だが、調査の上で補記することができる。
- ・資料にタイトルの記載がなく、調査により判明しない場合は目録担当者がタイトルを付す。
- ・書写地と書写者の記載があれば転記し、不明の場合は[書写地(書写者)不明]と補記する。
- ・書写者が明らかな場合、転写であれば[写]を付し、自筆であれば[自筆]と補記する。判断できない場合は、書写者の名前のみを記載する。
- ・書写年の記載があれば漢数字をアラビア数字に置き換え、和暦に西暦を補記する。

書写資料の場合は、タイトルや編著者、書写年の記載がないことも多いため、目録担当者の判断に委ねられる部分が多い。そのため、まったく調査を行わずに目録を作成すれば、[不明]ばかりの書誌になってしまう。また、多様な奥書をどう判

別するかについての注意点がないことも問題である。未調査のままでは、本奥書の年時を書写年として採用してしまう可能性もあるだろう。

一方、研究者は書写資料の書誌作成に関して、どのような注意点をあげているだろうか。今回は落合博志・海野圭介・堀川貴司・川瀬一馬氏らの論稿を確認したが、各研究者の見解はおおむね共通している。書写年代と制作の事情、伝写の系統が重要とし、本奥書と書写奥書の判別や、奥書の内容の信憑性や真偽の判断が不可欠だとする。また、書写奥書のない写本の場合は、蔵書印や紙質等さまざまな点を総合的に判断することの必要性を説いている。

書写資料の書誌を作成するためには、一つの情報によって総てを判断するのではなく、資料全体を調査することが必要だということがわかった。

4. 事例①『装束抄』

ここからは、実際に行った調査の過程と書誌の作成事例を紹介する。まずは「装束抄」(中央大学所蔵、以下「中大本」とする)を取り上げる。外題には「装束鈔 完」(左肩打付墨書)、巻首には「装束鈔後照念院殿令注置給也」と記載があるが、著者名や奥書はなく、書写者・書写年の情報は記されていない。書誌作成にあたり、書名を外題のまま「装束鈔」とするか、著者は誰かという課題が生じ、下記の通り調査を行った。

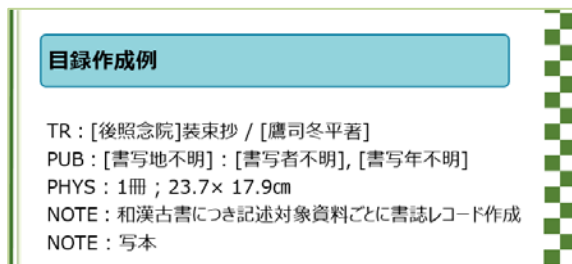
まず、『国書総目録』にて「装束抄」を引くと、同一の書名が複数件掲載されており、中大本がどれに該当するか判断できなかった。そのため、巻首の「後照念院」を日本古典籍総合目録データベース（以下「古典籍DB」とする）にて検索したところ、「後照念院装束抄」という書名がヒットした。古典籍DBにて宮内庁書陵部所蔵の「後照念院撰政冬平公記／装束抄」（以下「宮内庁本」とする）の画像が公開されていたため、中大本と比較したところ、宮内庁本とはほぼ同内容だった。

タイトルが「後照念院装束抄」に特定できた結

果、著者も古典籍 DB にて^{たかつかさふゆひら}「鷹司冬平」だとわかった。なお、その典拠とされる『国書人名辞典』によると、「後照念院」は鷹司冬平のことである。

さらに、古典籍 DB の「国書所在」の項目から、「後照念院装束抄」が『群書類従』に収録されていることが判明したため、『群書類従』の本文と中大本を比較したが、『群書類従』には巻首の一文（「装束抄後照念院殿令注置給也」）がなかった。中大本が『群書類従』を写した可能性は低いいため、『群書類従』の刊行年から中大本の書写年を判断することはできない。書写事項を資料自体から読み取ることは難しく今回は不明としたが、書写年は紙質等から江戸後期後半あたりと推定できる。

ここまでの調査結果をもとに作成した「装束抄」の目録を下記に示す。



5. 事例②『烏帽子考』

次に、中大本の「烏帽子考」を取り上げる。この資料は「烏帽子考」^{えぼしこう}「平禮考」^{ひれこう}「見聞諸家紋」^{けんもんしよかもん}の合写本である。著者の記載はないが、『国書総目録』によって「烏帽子考」「平禮考」の著者は伊勢貞丈、「見聞諸家紋」の著者は未詳だと判明した。なお、『国書人名辞典』によると伊勢貞丈(1717~1784)は故実家であったことがわかる。

合写本の場合、記載がないだけで何らかの叢書の一部であることも多い。中大本に親著作はあるだろうか。古典籍 DB にて「烏帽子考」を調べていくと、「親著作」に『神風叢書』、「国書所在」に『安斎叢書』という書名が確認できる。「安斎叢書」は伊勢貞丈の著作や伊勢家伝来の冊子をまとめた叢書で、「神風叢書」はその別書名にあたる。内閣文庫には『安斎叢書』2点と『神風叢書』1点の所蔵

がある。『内閣文庫国書分類目録』にて、3点の叢書の収録タイトルを確認した結果、いずれの叢書も中大本の3タイトルを収録することがわかった（収録巻数は写本ごとに異なる）。つまり、中大本は、『神風叢書』もしくは『安斎叢書』の系統の資料を書写した可能性が高いが、中大本には「烏帽子考」の巻首に「二十四」という墨書きがある。この数字は、『神風叢書』が中大本の3点を収録する巻数と一致する。そのため、中大本と内閣文庫所蔵の『神風叢書』（以下「内閣文庫本」とする）を著作ごとに比較していくことにした。

(1) 烏帽子考

「烏帽子考」には、中大本と内閣文庫本のいずれにも頭注があるが、中大本の頭注には不自然な空白箇所が見られる。内閣文庫本の頭注と比較すると、空白箇所は脱字であることがわかる(図1)。中大本が脱字を空白としている理由としては、親本に従っただけ、親本の虫食いや破れ箇所を判読できなかった等が考えられる。いずれにしても、中大本が内閣文庫本を直接写したとすれば、このような脱字は生じないだろう。

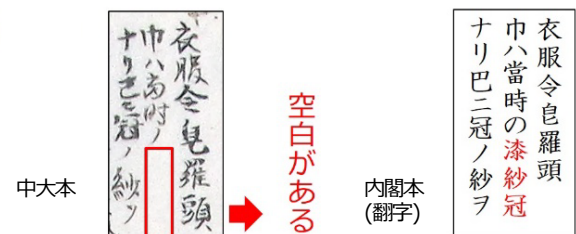


図1 「烏帽子考」の頭注の一部

(2) 平禮考

「平禮考」には、内閣文庫本にのみ寛政10年(1798)の奥書がある。中大本が内閣文庫本を写したものであれば、中大本にもこの奥書がある方が自然である。あえて奥書を写さなかった可能性は低い。寛政10年の奥書は、中大本の親本にはなかったと推測される。

(3) 見聞諸家紋

「見聞諸家紋」には注目すべき箇所が3点あった。1点目は、図2の四角で囲ってある横棒や馬の下の文字が中大本のみにあり、内閣文庫本に見

られないことである。これも中大本の親本が内閣文庫本ではないと考えられる例の一つである。

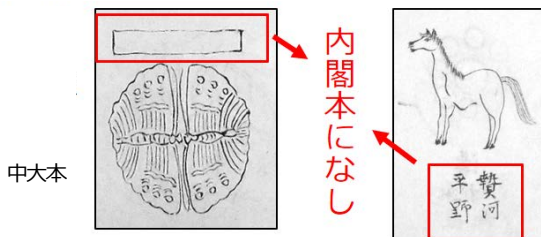


図2「見聞諸家紋」の一部（中大本）

2点目は、中大本に青色の墨書きが見られることである。例えば、中大本の本文では「將軍」の「將」の右側の「旁」の部分が青い墨で書かれている。内閣文庫本の対応する箇所を見ると、左側の偏の部分しか書かれていない。中大本の青色の墨書きは、書写した後に他本と校合した結果、書き入れられた可能性がある。青色の墨書きを除いた場合、中大本と内閣文庫本は「將」の字の左側しか書かれていない点が共通する。内閣文庫本は中大本の親本ではないが、本文としては近い関係にあると考えられる。

3点目は、中大本・内閣文庫本ともに「天明八戊申十月十八日写之 刑部源左檀子」という奥書が見られる点である。天明8年(1788)に「刑部源左檀子」が書写したという内容だが、中大本と内閣文庫本が同時に、同じ書写者によって写されたとは考え難いため、片方が書写奥書か、両方とも本奥書ということになる。先述の通り、内閣文庫本の「平禮考」には寛政10年(1798)の奥書があるため、天明8年が全体の書写年とはなり得ない。「烏帽子考」頭注の空白箇所の例を踏まえると、内閣文庫本より中大本の方が書写年が古いとは言えないだろう。よって、天明8年の奥書は中大本・内閣文庫本ともに本奥書と考えるのが妥当である。

なお天明8年の奥書は、秋田四郎「見聞諸家紋」群の系譜によると、『安斎叢書』の系統に見られる特徴とされる。中大本の親本が内閣文庫本でないことは確認したが、中大本が『安斎叢書』系統の本を書写した可能性は高いだろう。

内閣文庫本との比較の結果、中大本の書写年が

天明8年でないという結論が出たため、中大本の書写年を改めて考える必要が出てきた。そこで、蔵書印や旧蔵者から中大本の書写年を検討することにした。

中大本には「大江秀貞」という蔵書印が押されているが、この人物の生没年は工具書類にて確認できなかった。そのため、中大本が御橋惠言の旧蔵書である点に注目し、中央大学が所蔵する同旧蔵書の中に、伊勢貞丈の著作がないかを調査した。結果、『安斎叢書』に収録されている「軍神問答」と「諸説問答」の合写本が見つかった。同書を調べたところ、「軍神問答」には嘉永3年(1850)の奥書(年時のみ)があり、「諸説問答」には文化10年(1813)の「大屋氏大江秀貞」の奥書があった。この「大江秀貞」は中大本の蔵書印の持主と同一人物と考えられる。「軍神問答」と「諸説問答」の合写本は、ともに大江秀貞が書写した可能性が高いため、大江秀貞は主に江戸後期の人物だと考えられる。中大本の書写年は大江秀貞の没年よりも前となるため、書写年も江戸後期と推定された。

ここまでの調査結果を踏まえた目録作成例を下記に示す。

目録作成例

TR: 烏帽子考 / [伊勢貞丈著]・平禮考 / 伊勢平藏貞丈 [著]・見聞諸家紋 | エボシコウ、ヒレコウ、ケンモン ショカモン

PHYS: 1冊 ; 27.4×19.0cm

PUB: [書写地不明] : [書写者不明], [江戸後期]

NOTE: 和漢古書につき記述対象資料ごとに書誌レコード作成

NOTE: 写本

NOTE: 「烏帽子考」「平禮考」「見聞諸家紋」の合写本

NOTE: 烏帽子考: 3丁、平禮考: 5丁、見聞諸家紋: 24丁

NOTE: 見聞諸家紋: 本奥書「天明八[1788]戊申十月十八日写之 刑部源左檀子」とあり

NOTE: 『安斎叢書』の一部を書写したものと推定

NOTE: 印記「大江秀貞」

NOTE: 御橋惠言旧蔵書

6. 事例③『射法弓禮書』

最後に、中央大学・日本体育大学が所蔵する弓道に関する写本、「射法弓禮書」(以下「中大本」「日体大本」とする。中大本の発見は会員校の蔵書本から)を取り上げる。いずれも奥書がなく、資料から書写者、書写年代の情報が得られず、工

具書やデータベース類からも該当の資料を探すことはできなかった。そこで、中大本、日体大本を比較検討することにした。特に、書写者や書写年代を推定できるか、巻首の「射法弓禮書第二」の「第二」を巻数と捉えてよいかの2点を課題として比較することにした。

比較の結果、書かれている内容は、行数に違いがあるものの差はなかった。筆跡や紙質は、中大本は行書体に近く、繊維は太い、日体大本は楷書体に近く、繊維は細い。書写された時代は違うようだ。日体大本に蔵書印があったため、日体大で所蔵する同じ蔵書印がある資料を調査したが、奥書や筆跡から書写者や書写年代を推定することはできなかった。巻数については、日体大本に「射法弓禮書一」があったが、「第二」を巻数と捉えるにはさらに調査が必要と判断した。

以上のことから、筆跡や紙質に基づき、やや強引かもしれないが、中大本を江戸後期前半、日体大本を江戸後期後半と推定した。目録作成例を以下に示す。

目録作成例	
中大本	TR: 射法弓禮書 PHYS: 1冊; 28.1× 18.6cm PUB: [書写地不明]: [書写者不明], [書写年不明] NOTE: 和漢古書につき記述対象資料ごとに書誌レコード作成 NOTE: 写本 NOTE: 巻頭に「射法弓禮書第二」とあり
日体大本	TR: 射法弓禮書 PHYS: 1冊; 26.4× 18.8cm VT: OH: 弓術指南秘巻 PUB: [書写地不明]: [書写者不明], [書写年不明] NOTE: 和漢古書につき記述対象資料ごとに書誌レコード作成 NOTE: 写本 NOTE: 書き外題の書名: 弓術指南秘巻 (題簽の右側に被る) NOTE: 左肩書き題簽「射法弓禮書 二」 NOTE: 巻頭に「射法弓禮書第二」とあり NOTE: 印記「源姓」「照武」

7. おわりに

以下、各事例の調査方針やその結果をまとめる。事例①の主なる課題は、書名や著者名であるが、工具書やデータベースを使うことによって、特定することができた。事例②の主なる課題を書写年の絞り込みとしたが、合写本の各タイトルを調査したり、本文や奥書、蔵書印を他本と比較したりすることで、少しは解決できた。事例③の課題は、

書写年の推定にあったが、資料からは推定が困難であった、更にはデータベースや工具書の類からも、手掛りを得られなかったが他本との比較・紙質を調べるなどによって推定せざるを得なかった。また新たな課題として、この資料は1巻本でよいかという疑問も出てきた。

上記の3例を踏まえ、書写資料の調査方法を簡条書きにまとめた。

- 工具書やデータベース、さらには関連論文を参照し、人名や書名を調査・確認する。
- 調査対象資料が所収されている叢書を調査する。
- 序、跋等、本文の中からヒントを探す。
- 他本を探し、奥書や識語を比較する。
- 他本と自館の本文を比較して書写年の前後関係を考える（他本に書写年が明記されている場合は特に有効）。
- 同一寄贈者の文庫内で関連する蔵書を探す（書写者等が判明する場合もある）。
- 蔵書印を調査し旧蔵者を特定する（旧蔵者の生没年から書写年を推定できる）。
- 表紙や紙質、装訂、筆跡等からヒントを探す。
- データベースのみに頼るのではなく、知人友人等と人を介し人との繋がりの中で、資料の照会をする。

書写資料の書誌作成においては、あらゆる方向から調査・検証することが必要であるが、上記の記載は調査を進める上での目安となるのではないだろうか。また上記以外の手段として、調査対象資料を専門とする教員が学内にいる場合、その教員に質問するという方法もあるだろう。

後日、報告大会の参加者から、「研究内容や結果が業務にどう影響したか、活用できたか教えてほしい」との質問があったため、本稿にて回答する。会員からは、簡略な書誌を充実した書誌へと修正できるようになった、基本的な調査の進め方が身についた、以前よりも展示資料の解説の情報量を増やすことができた等の意見があった。目録業務

に限らず、今回の研究成果は図書館業務のあらゆる場面で活かされている。

更に今回の研究発表を通じて、冊子体の工具書や蔵書目録の蒐集、加えて未整理のままに放置されている資料・仮目録は作成されているが公開されていない書物がデータベースに著録されている資料より多くある点を考えれば、人との繋がりを基にした資料の照会の必要性等、データベースだけを頼りにするのではなく、これらの点にも日ごろ努力すべきと強く感じた。

■参考文献

- 「国文学研究資料館和古書目録古典籍DBの作成」増井ゆう子・喜多妙子（平成27年度日本古典籍講習会、2016年1月）
- 「見聞諸家紋」群の系譜」秋田四郎（『弘前大学 國史研究』99、1995年）
- 「写本について「写本の書誌における諸問題」」落合博志（平成27年度日本古典籍講習会、2016年1月）
- 「写本について―奥書・識語を中心に―」小山順子（第14回日本古典籍講習会、2017年1月）
- 「写本について―奥書・識語を中心に―」海野圭介（第16回日本古典籍講習会、2019年1月）
- 『くずし字辞典』東京手紙の会編（思文閣出版、2000年）
- 『くずし字用例辞典〔机上版 新装〕』児玉幸多編（東京堂出版、1993年）
- 『国書人名辞典』1-5、市古貞次〔ほか〕編（岩波書店、1993-1999年）
- 『国書総目録〔補訂版〕』1-8 著者別索引（岩波書店、1989-1991年）
- 『国書読み方辞典』植月博編（おうふう、1996年）
- 『古典籍古文書料紙事典：必携』宍倉佐敏編著（八木書店、2011年）
- 『書誌学入門』川瀬一馬（雄松堂出版、2001年）

- 『書誌学入門：古典籍を見る・知る・読む』堀川貴司（勉誠出版、2010年）
- 『新版日本の紙：全国手漉き和紙見本帳』全国手すき和紙連合会（全国手すき和紙連合会、2006年）
- 『新編蔵書印譜〔増訂〕』上中下、渡辺守邦・後藤憲二編（青裳堂書店、2013-2014年）
- 『日本古典籍書誌学辞典』井上宗雄〔ほか〕編著（岩波書店、1999年）
- 『日本書誌学用語辞典』川瀬一馬（雄松堂、1982年）
- 『日本目録規則 1987版改訂3版』日本図書館協会目録委員会編（日本図書館協会、2006年）
- 『日本目録規則 2018年版』日本図書館協会目録委員会編（日本図書館協会、2019年）
- 『内閣文庫国書分類目録』上下 索引（内閣文庫、1961-1962年）

国立公文書館デジタルアーカイブ

〈<https://www.digital.archives.go.jp/>〉

ジャパンナレッジ

〈<https://japanknowledge.com/library/>〉

新日本古典籍総合目録データベース

〈<https://kotenseki.nijl.ac.jp/>〉

蔵書印古典籍データベース

〈http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/〉

電子くずし字字典（東京大学史料編纂所）

〈<https://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>〉

日本古典籍総合目録古典籍データベース

〈<http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>〉

目録システムコーディングマニュアル

〈<http://catdoc.nii.ac.jp/MAN2/CM/mokuji.html>〉